火花 28
1968 7.10
共産主義同盟 関西地方委員会

○8月国際会議の意義について

＜プロレタリア国際主義の獲得＞

①われわれは、7回大会において国際部を発足させた。大会において確認された国際部の活動の基本方向は、第一に「世界革命の任務の一環」としての国際部の設置であり、第二に、その任務はわれわれが国際共産党を早にだちに成立宣言できず、しかしその要求が死活である日日、「世世界に戦略的基準を持った、生きた交通形態の生産こそ先決である」ことであり、第三にその活動内容は「(a)第一共産党形成―国際共産主義運動の戦略的統一のための統一戦線―党派斗争の日本における拠点であって、(b)国際的な運動の環―反帝反政府斗争の国際的反戦斗争の党レベルでの意志統一の形成が第一に実践に問われ、(c)大衆組織、ことに世界運などによって推進されるべき反戦インターの組織と運動の指導機関であって、(d)我々の国際活動の実態を知りつくして展開せしめるに到る国際情勢、連絡の中枢である。」

それゆえ、第四に、その活動の質は、第4インター系の単なる細々や、没主体的な外国運動に対する抜跪とは無縁であり、また中国派にみられる出先機関とは異質である。更に第五に、ソ連・日共に見られる自己の没国際性―一国階級斗争論と人民戦線＝議会主義コースを左翼的スクーリンでおおうための大衆操作的国際運帯と決定的に対立する。

このような国際部の基本路線のもとに、当面の準備として、「8月を目標とした解放戦線との連帯―70年安保斗争のための国際反戦会議＝インターの結成、招集」が決定されたのである。

②大会決定のもとに、国際部活動はただちに精力的に展開された。そして、革命的左翼のヘゲモニーになる国際会議はほぼ全面的決定通り、準備されようとしている。具体的には、わが同盟の呼びかけのもとに、6月29日"社青同解放派"社青同国際主義派、社青同M L派・社青同の代表が集り、「11月国際反戦会議日程実行委員会」を発足させた。（実行委員及び・スケジュールなどはプロ通11号参照のことしこの時点で、われわれは、厳密・この国際会議の画期的意義と、その獲得目標について、明確的意志統一を勝ちとらねばならない。

③国際会議準備過程において、国際部によって討議され、具体化された諸問題は、8月国際会議における政治的獲得目標を(a)全進国革命を軸とした世界革命の展望が要求されていること、(b)69年NATO、70年安保斗争の国際的意義を明確にし、日・米・韓の統一的政治斗争を準備すること、(c)70年安保を環太平洋圏地帯の武装斗争で斗うこと、(d)佐藤訪米を羽田とワシントンでの共同斗争で阻止すること、等の諸点に具体化したことである。

④このような段階において、われわれが意志統一すべき点は、われわれが、先に述べた獲得目標をもとに、国際会議を準備し成功させること、このことの階級的意義でなければならない。われわれは、この点に関しては第一に、8月国際会議は、すでに現実の運動が、国際的統一行動として斗われる中での世界階級斗争の要請に対するわれわれの解答であり、第二に、世界同時革命の観点から、諸国の斗争を政治的に統一するなかで、われわれの任務を規定し、そうすることによって、われわれのみが、口先だけの国際主義者を排し、真のプロレタリア国際主義を実現していることを示すことに他ならない。第三に、プロレタリア国際主義は世界階級斗争の統一的諸任務＝第一共産党形成の準備を抜きにしては依然として空語であり、われわれが、国際主義実現の体制を作りえた現段階は、口先だけの国際主義を粉砕してゆく党派斗争の要を獲得したことである。ここにおいてわれわれは、国際主義の観点に貫かれた一国的政治指導部から自らを飛躍させなければならない。

⑤8月国際会議の意義が以上の如くであれば、この会議を早党的に準備し、われわれに与えられたこの有利な条件を、われわれの党的飛躍として結実しうるかどうかは、一にプロレタリア国際主義に対する意志統一の内容にかかっているといわねばならない。

国際会議そのもののもつ客観的意義をわれわれが組織しつくつくすことができるかどうか、そのカギはここに存在する。

⑥ われわれはいまここで、国際共産主義Mを全面的に総括する余裕をもたない。われわれにとって重要なことは、いま緊急に要請されているところのプロレタリア国際主義の今日的内容が何であり、どのような重要性をもっているか、この点に関する十分みつな意志統一である。われわれは、レーニンのオニインターナー形成の活動にしぼって、そこからの緊急の課題への接近を開始しよう。

⑦ 一九一四年ヨーロッパ戦争の開始の中で明らかになったことは、オニインターの諸党、ことにその中核たるドイツ社会民主党が、一九一二年のバーゼル宣言の原則を、ふみにじり、ドイツ帝国の戦争政策に加担したことである。この事態は、日和見主義の社会排外主義への転化として一般に語られている。そして、革命的左派のスローガンとして「帝国主義戦争を内乱へ、自国政府の敗北」を掲げたことも周知の事実である。ここから我々は、帝国主義と社会排外主義の関係に対するおきまりの確認をすることに止めず、当時の具体的現実との関連で、この問題をとらえ返し、今日の教訓として生かさねばならない。

⑧「われわれの理解する社会排外主義とは、現在の帝国主義戦争で祖国ヨーロッパの思想をみとめ、この戦争で社会主義者が自国のブルジョアジーおよび政府と同盟することを正当化し、自国のブルジョアジーに対するプロレタリア的＝革命的行動を宣伝し支持するのを拒絶する事々のことである。社会排外主義の基本的な思想的・政治的内容が日和見主義の基礎と完全に一致することは、まったく明らかである。それは同一の潮流である。一九一四～十五年の戦争の情勢のもとでは、日和見主義はべつならぬ社会排外主義を生みだすのである。日和主義の主要な点は階級協力の思想である。戦争は二の思想を最後までおし進め、しかもこの思想の通常の要因や動機に多くの異常な要因や動機をつけ加え、ばらばらになっている住民大衆を特別の威力や暴力によってむりやりにブルジョアジーに奉仕させる」

（レーニン、オニインターの崩壊）

レーニンのこの分析は、戦争の勃発とオニインターの盲目たるドイツ社会民主党の戦争政策への投力という「信じられない程」の現実の経験により、与えられたものである。そして、レーニンはロシア一国において、メンシェヴィキとの党派闘争のなかでボルシェヴィキを鍛えあげ、後にロシア革命とオニインターの結成の中核としての役割をはたすのであるが、この当時における世界的規模での党派闘争には成功しなかったのである。ここでわれわれが注意しておく必要があるのは、社会主義革命の条件の成熟が、プロレタリアートの指導部をして、その一貫的主張を実現させないようなダイナミックな政治過程としてあらわれ、ロシアでは帝国主義の危機を社会主義革命のために利用することを確認していながらも、実際にその機会がおとずれたときにはなすすべを知らなかったことである。

そしてこの危機は日共の言うように、帝国主義の鎖の弱い環にあらわれるのでなく、まさに全世界的にあらわれるのである。したがって、革命を世界的観点から位置付け、世界革命として実現する展望を確立していないならば、この世界的な危機において、指導部は方向を見失い、ブルジョアジーの排害主義におし流されるのである。

④、帝国主義戦争の時代に、社会排害主義として、ブルジョアジーとともに戦争政策に加担したところの分流、それはその似物の段階において、日和見主義として存在した。その特質はドイツ社会民主党に典型的であるが、ロシアでは権力の獲得を社会主義革命、そしてプロレタリア国際主義を語りながらも、古典階級闘争に対する分析をおこたり、ペルシュタインが先駆的に主張し、後にカウツキーが拡帝国主義論において追随したところの帝国主義の世界的発展の純化を期待していたのである。

そしてドイツ社会民主党の現実の政策は、大衆行動に力点をおかず、もっぱら労働組合と選挙闘争を軸にした民主主義闘争、改良闘争が中心にすえられていた。なお皮肉なことにドイツ社会民主党は、戦争の後づけに、議会制における権力を宣言するのであるが、この権力は社会主義と同盟であり、革命のためにはむしろ打倒されるべきものでしかなかったのである。

⑩ かくてオニインターの崩壊は、労働Mにたける日和見主義の崩壊であり、帝国主義戦争を前に、日和見主義はもはや日和見主義としてとどまることが出来ず、帝国主義に屈服し、社会排外主義に転化した　とである。このダイナミックな進行のなかで、レーニンは「日和見主義を一掃したオニインターナショナルを文と叫んだのである。「オニインターナショナルの崩壊は、社会主義的日和見主義はそれにとまだつ『平和な』時代の労働運動の発展の産物として成長したものである。この時代は議会政治とすべての合法的可能性との利用、大衆的な経済組織の創設、広範な労働者定期刊行物の創刊などのような生産手段を労働者階級におしえた。他方では、この時代は階級闘争を否定し、社会平和をとき、社会主義革命を否定し、非合法組織を原則的に否定し、ブルジョア帝国主義をみとめようとする、などの傾向を生み出した」（レーニン「日和見主義とインターナショナルの崩壊」）

ロシアにたいして、ボリシェヴィキは、この日和見主義との党派闘争を闘いぬき、そのことによって自らをオニインターの拠点とすることができた。プロレタリア革命は、日和見主義との党派闘争の勝利のなかで実現され、そして、その党派闘争の要はプロレタリア国際主義にあったのである。

⑪ 今日、世界階級闘争は、後述することく、スターリン主義の世界戦略とへだたった地点から出発し、国際反戦闘争として展開され、さらにそれは帝国主義の不均等発展のなかで、新たな発展を内包している。ソ連＝日共が、この国際階級闘争の新たな展開に対応できず、自らの「自らの世界革命路線」が民族的なそれであることが暴　されつつあるとき、われわれはプロレタリア国際主義の任務を荷いこの日和見主義との党派闘争を断乎としておし進めることが極めて　重要　である。

⑫ 日共との党派関係から8月国際会議を位置づけるならば、この間、実力闘争の拡大により、基地闘争、農民M、学生闘争等、あらゆる戦線から逃亡しつつある日共の最后の支えである国際平和勢力に対する党派闘争の要求されれわれが獲得したこと、これである。

われわれは第一に、国際会議の提起の中で世界各国階級闘争の現実を明らかにし、その最前線においてスターリン主義がのりこえられていることを明らかにしなければならない。第二に今日世界階級闘争は同質的であり、まさに世界的規模での統一的政治指導が要求されていることであり、われわれはこの要請に応えなければならない。第三に決定的な時期に、　自国政府打倒の闘争は、現段階での世界階級闘争の結合によって準備されるのであり、国際統一行動と自国政府の打倒を分離して考えるのでなく、排外主義との闘争において結合しなければならない。

革命的左翼内部にみられるプロレタリア国際主義＝自国政府打倒という教条的図式を克服しなければならない。自国政府打倒の観点の強調によって、われわれの国際的任務を低めることは、排外主義との党派闘争におけるプロレタリア国際主義の意義を理解しないことであり、現実には日和見主義に対する党派闘争をおこたり、社会排外主義への道を開くものである。

国際反戦斗争と我々の態度

(一)反戦斗争の総括

第二次世界大戦以降運動は大きくわけて、次の三つの時期にわかれる。

(1)第二次大戦の終了から、47年のマーシャルプランまで。(45－47)

(2)マーシャルプランから56年ソ同盟20回大会まで(47－56)

(3)20回大会から現在まで(56－68)

この三つの時期の反戦運動をA、B、Cで簡単にみてみることにする。

〈A〉「日連軍の幻想」(45－47年)

①この47年の終戦から47年のマーシャルプランまでの時期の国際情勢を規定しているのは、第二次世界大戦と、これに対する各列強、そして第三インターのかわりが中心的な背景となっている。即ち日独帝国主義に対する米、英、仏、ソを中心とする、いわゆる「国連軍」による終戦にこの時代は規定されていた。そしてこれと同時に世界的規模で戦后の革命期であるということがこの時代の特徴となっている。

この戦后の革命期を規定したのは、この「日連軍」と各国の党の動向によって大きく規定づけられている。日本でもそうであったように、この「日連軍」をいわゆる解放軍と規定した例は、他の国でも同様のものであった。そしてこれが各国の革命運動に果した犯罪的役割は大きかった。そしてこれは又、39年から41年にかけての「他ソ不可侵条約」とそれ以降の43年5月15日のコミンテルンの解散が深く関係していたのは周知のことである。

②このため、45－47年の時期は、終戦の平和のムードと、他方戦后の革命的気運がもり上っていた。しかしこの革命の気運を指導する部隊はなかった。インターは解散されていた。そして各国の党は、各国で「反ファッショ」から、終戦にもとづく自国の利益を優位においた考えにたっていた。そしてこれは第二次帝国主義戦争に対して、その帝国主義列強相互の同盟と、これに敵対する他のもう一つの帝国主義列強の同盟に対して、インター、ソ同盟を始めとする各国の共産党が、その一方と同盟し、他と敵対することが、いかに帝国主義に利用され、又帝国主義を美化するものであり、階級斗争に大きな打撃を与えるものであるかということをよく示していた。戦后の革命運動と反戦運動は、こうして大衆の高揚にもかかわらず、十分な役割を何ら果すことができなかったばかりでなく、米英仏帝国主義を美化する役割を果したのである。

③一九一九年、第一次大戦の終りに、もはや二度と、共産主義運動の頂から崩壊することのないように結成されたはずの第三インターは、戦争中に崩壊したのではなく、インター自からの手で解散された。そして米英仏帝国主義との妥協のためのいけにえに供されたのである。(45－47年)の戦后の時期は、この誤りを余りにもはっきりメセた時期であった。

〈B〉いわゆる「体制固定化」の時代(47－56年)

①この第一期の誤りの結果は、47年「マーシャルプラン」を中心とした、米帝のヨーロッパ諸国(先進諸国)の復興計画と諸反動政策の始まりによって現実のものとなった。47年9月末開かれた第一回コミンフォルム会議は次の様にいった。「ファシストドイツ及び帝国主義日本に対する戦争で協力してきた昨日の軍事同盟国家間の関係には変化が生じてきた。いまや国際政策の上で、相対立する二つの方向が確定されるに至った」と、「アメリカはその主たる競争相手――ドイツ及び日本が除かれ、イギリスとフランスが弱化した条件のもとで、自己の世界制覇の確立を目標とする、新しいおっぱらな膨張政策に移った。」と。こうして47－56年にわたる約10年間のいわゆる「体制固定化」の時代が始まったのである。

②46年3月のチャーチル英首相のフルトン演説、同年9月のバーンズ米国務長官のシュツットガルト演説同12月の米英両軍の占領地域の統合、47年3月のギリシア、トルコへの軍事経済援助の「トルーマン、ドクトリン」同6月の「マーシャルプラン」(欧州復興経済計画)そして同11月のコミスコ(社会主義インターの前身)等々……と、一連の反動の時代と、いわゆる「体制固定化」の時代が始まり、インドシナ戦争、朝鮮戦争を始めとする帝国主義戦争又政治的暗殺が次々!!

たのである。そして帝国主義諸国に於ては、一連の反動の時代であった。そしてこの時代の「反戦運動」は国際的戦争、「体制固定化」の行詰、そして国内の反動の中で斗われたものであった。

③ 然し、この間、中国革命、54年の中国とインドとの「平和五原則」「コロンボ、グループ」の結成、インドシナ戦争休戦、55年「バンドン10原則」そして同55年7月「ジュネーブ巨頭会談」と54年を一つの境として特に、植民地、被抑圧民族の民族解放斗争が、インドシナ休戦とともに、一つの潮力としていわゆる「体制間矛盾」のあいだをぬって、指頭しはじめたことであった。

これは、帝国主義下の「反戦運動」とはつまりこの民族解放運動は、国際政治における「体制間矛盾」対立に対して、植民地、被抑圧民族諸国の「民族自決」の要求を、これら大国の対立に乗じて最微しようとした点にあった。

(C) いわゆる「平和共存」の時代（56-現在）

① この時期は大きく二つの局面にわかれる。一つは56～62にかけてであり二つめは、64年以降はっきりとあらわれた局面である。55年の「ジュネーブ会談」と56年のソ同盟20回大会における反スターリニズムの波にのって、いわゆる「平和共存」の時代のはじまりと、この頂点でもある、ケネディ、フルシチョフ時代の「反戦運動」は、「核競争」と「核軍縮」に特徴づけられたものであった。この「米ソの平和共存」の関係は、帝国主義諸国の国内生産成長と帝国主義間対立のはじまり、そして、さきの後進諸国の民族自決の要求が一体となって、この局面を規定していた。64年頃はっきりと現れてきた傾向は、核兵器をもとにした米ソの平和共存が中級等の核実験にもとずき崩れ、又これをささえる米ソの地位の後退によっていたこ、これは中ソの対立、米、EECとの対立等々によってうながされていた。② この基本は52年以降のヨーロッパ、日本の帝国主義の強化による帝国主義の不均等発展にもとずくものであり、これを反映した、中ソ東欧の対立の表面化でもあった。③ こうした状況の中で、大国の対立に乗じて「民族自決」を獲得しようとしていた植民地・被抑圧民族諸国の民族運動が根本的な役割をつとめたことであった。

② ほゞ60年のはじめに終った米ソの核軍拡競争は56年、57年以降、年々拡大をたどり、これとともに「核禁運動」が全世界的におこり、これが国際反戦斗争の一時代を表する傾向が強まった。もし「新核戦争」が、あったならば、

① 人類、階級の大敵れの展開があり、これを阻止するために、核軍拡反対、核使用禁止の要求としてあらわれているのである。この間の「反戦運動」の大部分は、このような及たらぞあらわれたのである。然しその内容をみた場合には、帝国主義諸国の対立、特に米帝国主義と、EEC等との対立が基本であり、これに対抗する及たをめぐって「米ソの平和共存」とは、ソ連の米との平和共存と西独主要打倒の政策とEECとドゴール等と、英国のソ連との「平和共存」と中国主要打倒政策ということであった。そしてこれに対してEEC、中国の対応は、こうした米ソの対応に対する矛盾があらわれざるを得なかったのである。そして植民地、被抑圧民族諸国の従来の大国の矛盾、対立に乗じた民族自決の要求が、現実にこんなんになって来たということであった。

こうして、この時代の「反戦運動」は、これらが混在したものであり、大部分としては「核禁運動」として全体としてはあったのである。

③ 64年以降の帝国主義諸国間の対立が一段強化し、中ソ、東欧をめぐって社会主義諸国の対立が激しくなりの植民地、被抑圧民族諸国の国家を計画化させていったのである。

フランス、中国等の独自の核実験により、米ソの核拡散防止を目的とする米ソの動きは現実には無意味になり、「核禁運動」は急速にかたいしていった。又植民地、被抑圧民族諸国の従来の意味での大国の対立に乗じた「民族自決」もその性格を変えたのである。

民族ゲリラ戦争の共同斗争であり進められて来た従来の斗争は、64年1月のパナマ人民ほう起にたいする武装干渉インドネシアの9・30事件11月のギロ国アルジェリアアフリカにおける一連の反革命クーデター、64年中東戦争、52年の大略軍事干渉、革命と反革命がこゝまでおこり、ゼネラルは、ベトナム等の栄光の斗争に対して全世界のプロレタリア人民の支援、共同斗争が行なわれた。

こうして64年以後の第反戦斗争は64年以降のそれとは大きくことなったのである。

(二)現状と党派斗争の必要性

〈A〉帝国主義の不均等発展と日和見主義

①資本主義が産業資本主義時代から帝国主義時代に入ることによって、世界革命の「物的基盤」は后退し、消滅したのではなく、それは発展し、拡大しているのである。帝国主義の不均等発展は、世界革命の后退を意味するのではなく、それが増々発展させられねばならぬこと、又発展することを証明するものである。

「発展した帝国主義の条件の下で作出している資本主義諸国の不均等な発展の法則のような新しい要因があらわれ、この法則は軍事的衝突の不可ヒなこと、資本の世界戦線が全般的に弱まり、個々の国で社会主義の勝利が可能であることを物語っている」とすれば、それは世界革命という「単純なもの」「単一の国际革命という考えしかたい仮定のかわりに、ここに戦々は個々の国に於る一連の革命が歩一歩積み上げられ」る以上に、「個々の国で社会主義の勝利が可能である」というのは、それ以上に、単「一の世界革命が可能であることを示すものである。

帝国主義の支配、矛盾は、政治的、経済的、軍事的に増々世界的な絡まりを示しているのであり、この絡まりは一層複雑に発展せずにはおかないのである。この帝国主義の支配、矛盾、対立は、プロレタリアートの斗争を増々世界的な単一の斗争、一つの革命、一つの戦争へと発展させずにはおかないし、プロレタリア国际主義にもとづいた世界的な指導と、組織と斗争をプロレタリアートに要求するのである。この任務を否定して「資本主義体制」に対する「社会主義体制」という「体制」と「体制」の関係で問題をたてたり、又「個々の国に於る一連の革命」の「歩一歩の積み上げ」にプロレタリア国际主義を引き下げることは、全くの誤りと言わねばならない。

②①56年－60年はじめの、ソ同盟の「平和共存」と「反戦平和擁護斗争」は47年から55年の「体制間矛盾の時代」とはうらはらに、〈米帝国主義に対する基本的な態度を一変させ〉米帝国主義の美化と明確に結びついて提出されていたのである。「20回大会」は、社会主義が「世界の体制」になったことと同時に、帝国主義戦争の不可ヒ性は、「オニ次大戦までの時代に於てはこの命題は絶対に正しいそのものであった。しかし現在は根本的に事態が変化した」とし、社会主義が大きくなったので、「帝国主義者はかの立場にたつ政策を実施する物質的基盤を失ってしまった」として、だから「米ソの平和共存」は正しく、又「核禁運動」は可能であり、正しく、これでもって帝国主義戦争を防止することができると考えたのである。これが帝国主義の美化であることは、今では誰の目にも明らかになった。そしてフランス、中国の核実験攻略は、これに引き続き「核拡散防止」米ソの核の脅威を述べていることは周知のことである。

③中国共産党は「資本主義の不均等な発展が更に激化している」ことを認めつつも、しかしヨーロッパ、日本等の帝国主義は「なんとかしてアメリカの支配から抜け出そうとはかっている。」この面で彼らは社会主義諸国や各国人民と共通点をもっているとして、反米勢力の一環と規定することによって、米帝国主義以外の帝国主

――続く――

義を美化する結果におちいっている。（オ二中間地帯をめぐる議論）又、「平和五原則」「バンドン十原則」に示された、植民地及び被抑圧民族諸国が情勢の変化と共に、これら諸国に対する帝国主義の介入、そしてこれら諸国の民族ブルジョアジー、地主、軍事政権、が帝国主義との結合をつよめ、解放運動に敵対しはじめることによって、現在では「民族自決」をになう部隊とこれに対立する部隊の革命と反革命がこれら諸国で公然と進行するへ（4・17）ことによって大衆的な与えたのである。

これは農村から都市を包囲するという世界革命の考えが、帝国主義に対する不均等発展に対するはっきりとした考えにつらぬかれていないところから生れているものに他ならない。それはソ同盟と同様、帝国主義対立と帝国主義戦争の不可避性について、十分に対応することができず、反米戦争、反米民族主義におちいっていることである。

それは、マターリンの「体制」と「体制」の闘争、そして「個々の国における二重の革命」の歩一歩のつみあげとして世界革命を考えることにもとづいている。戦後の反戦闘争は、このような考えに基本的に規定されたものになっているのである。

③ 日本共産党はこうした資本主義からの社会主義への移行過程の問題については、ほぼ同様の立場に立ち、巧妙に日本帝国主義の帝国主義的性格をいんぺいすると共に、帝国主義の不均等発展と帝国主義戦争の根本問題をよけて通って、次のように規定するのである。「資本主義の不均等発展により、アメリカ帝国主義の相対的地位は低下し、帝国主義陣営内部の矛盾は強まっているが、帝国主義と反対の国際 勢力は協力して三大革命勢力に対抗するため、依然としてアメリカ帝国主義を盟主とする軍事的政治的同盟に結集している」とし、これに対して、三大革命勢力の統一と団結を強める必要があると主張するのである。

これは対立もあれば同盟もあるということを言っているのにすぎない。もしそうでないとすれば、「帝国主義の不均等発展と戦争」ということを提出されていない問題に対して、三大革命勢力に対する帝国主義の反革命同盟による「軍事的政治的同盟」が現在、そして今后の中心的問題であり、これに対して、革命勢力が世界革命で世界戦争を通ずるとはいうことを主張しなければならないのである。すなわち帝国主義の不均等発展が生み出す矛盾、対立の中心は、帝国主義間対立以上に現在では階級間対立、世界的規模の階級間対立にあるということを主張している場合にのみ、上記のごとき政治主張の正当性はありえないし、これ以外の場合は、折衷的状況主義に他ならず、帝国主義の本質をあいまいにしこうして帝国主義を美化することを意味するのである。

④ 我々は、現代における最も基本的な問題は、全世界的規模での階級闘争、階級対立にあることを、プロレタリアートとブルジョアジーの第一の世界的闘争にあると考えている。然し、この闘争は決して静止的な二大階級の対立などではなく、現実には帝国主義が不可避的に生み出さずにはおかない諸矛盾のいっそうの激化と深刻化の中で、最も中心的には帝国主義間対立とその戦争の不可避性の過程で闘われると考えているのである。

そして、この「諸矛盾のいっそうの激化と深刻化」は帝国主義相互の対立と矛盾を呼び起し、それは当然、これら諸国の戦争、帝国主義戦争へと発展するだろうと考えている。こうした中で、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争がどのような形態をとってあらわれるか、反革命軍事同盟に対する反革命同盟の一大決戦、あるいは、主要に体制間戦争、あるいはプロレタリアートの敗北から帝国主義戦争、等々といったことは、そのいずれかに目標を限定することによって我々の手足をしばる必要がなく、問題はこのいずれの場合においても階級闘争と革命は、我々が帝国主義との関係で考える限り、これは世界的規模の、同時的性格、同質的性格を帯びた、一つの階級闘争

(三)現代の戦争と反戦及び革命について

①現在の反戦斗争は、戦争の基本的、そして全体的評価を要求して来ている。

(イ)我々は帝国主義が存在する限り戦争は不可避であるという、マルクス・レーニン主義の命題が「第二次大戦前までの時代においては……絶対に正しいものであった。しかし現在は根本的に事態が変化して正しくなくなったなどとは考えない。この命題は現在でも正しいし、この命題を否定するものは、帝国主義の「護美者」に外ならない事をはっきりさせねばならない。そしてそれが戦争である以上それは決して限定戦争にとどまる事は出来ないし、決戦戦争、熱核戦争に発展するだろう事を否定は出来ない。

(ロ)又、現在斗われている帝国主義の植民地、被抑圧民族諸国及び人民に対する戦争が限定戦争の枠の中でしか斗われないという事を夢想する事は出来ないし、それが熱核戦争へ発展しないと言う事を断言し、保障する事は出来ない。

(ハ)又、体制間戦争あるいは東欧又は中国に対する、あるいはこれら諸国に対する戦争が起らない、又それが熱核戦争にならない事を保障する事は出来ないし、又全世界的規模での帝国主義が相互介入した、革命に対する反革命戦争が起らないという保障も持っていない。戦争と兵器の発達、そして帝国主義の矛盾は、こうした矛盾の激化、爆発を否定しないばかりではなく、こうした危機をますます強く我々に感じさせずにはおかないでいる。そしてこうした事実を否定することは、当然、ストレートに帝国主義の美化を生み出さずにはおかないし、ブルジョアジーのこの世界的な「恐怖政治」が、現在の階級斗争を大きく圧迫しているこを忘れてはならない。

戦争と兵器の発達は、たしかに、人類絶滅を死においやっとあまりある破壊力をつくり出した。そして、こうしたことは、ソ連の「核禁」「核拡散阻止」を中心にした「反戦平和運動」が、かつての国際運動と同様に、現実の前には、むなしいものになってしまっていることを示している。又、植民地、従属民族諸国の民族運動が、この「恐怖政治」の前に、孤立して斗うことが、どれほど危険の大きい、犠牲の大きなものであるかということも示している。そして又、「社会主義諸国」の国際意識が、一挙によって、「自由おうなし」に高まらずにはおかない事とも重要である。

②そして、この「恐怖政治」と「戦争」の震源地である帝国主義のじ臓部において、その根源を打倒し、粉砕することなくしては、問題の本質的解決がありえないということも人々は良く知っているのである。この帝国主義下のプロレタリアートの自国政府打倒の斗争が、帝国主義と社会排外主義＝日和見主義によって圧迫されているということも事実である。我々は今、この帝国主義との斗争を目の前にして最も基本的な問題から斗いを組織する必要がある。一つはプロレタリア国際主義、そしてもう一つはこのプロレタリア国際主義に導びかれた自国政府打倒のために、どうしても、プロレタリアートのあいだの日和見主義＝社会排外主義との斗いを系統的に、至るところで組織するということである。帝国主義を美化し、プロレタリア国際主義を放棄し、各国内部の日和見主義＝社会排外主義を助け、又、自分もなりたっているような、ありとあらゆる傾向との党派斗争こそ、今日の我々の課題である。

そして、この斗争は、色々の次元での斗いとして組織されるとしても、我々は、国際的活動、そして国内の活動において、現実を一歩でも高める斗争をつらぬき、これらの諸潮流を暴露し、粉砕してゆかねばならない。

今や、大衆の中における、「反戦斗争」は、ただ現に斗われている戦争に対するだけでなく、すでに①でのべたごとき、現在の、そして今後の戦争と反動、帝国主義の「恐怖政治」がおもくのしかかっていること、そして、まさにここに大衆の巨大なエネルギーがあることを知り、それが、帝国主義と社会排外主義＝日和見主義が大衆を抑さえこみ、抑圧している地点でもあることを理解し、党派斗争を押し進めると同時に、この大衆の巨大なエネルギーを解放せねばならないのである。